



The Japan Association for Language Education and Technology

外国語教育メディア学会

NEWSLETTER No. 102

July 2024

発行 外国語教育メディア学会 (LET) (会長：森田 彰)

事務局 〒310-8585 水戸市見和1-430-1
常磐大学人間科学部 千葉敦研究室内

HP <http://www.j-let.org/>

巻頭言

新たな phase から

会長 森田 彰 (早稲田大学)

2023 年度は、どうにかコロナ禍からの回復が見られた 1 年でした。新型コロナウイルス感染症が制度的に 5 類に移行し、それが日々の日常を取り戻すきっかけになったことは事実でしょう。しかし、それがかつての日常ではなく、新たな日常となることも私たちは予感し、また実感しました。

LET の活動も例外ではありません。支部研究会、全国研究大会の運営形式も対面を基本としながら、様々な形で新たな取り組みがなされました。関東支部をホストとして開催された全国研究大会のテーマ「外国語教育と「技術革新」：変わるもの、変わらないもの Language Education Tradition Meets Innovation: Honoring Heritage, Embracing the Future」は、まさに、新たな日常、新たな教育と教育環境に立ち向かう私たちにとって、自分の思考をまとめる願ってもない機会となりました。改めて実行委員会の皆様に感謝いたします。

私たちの教育への取り組みに大きな変化を迫ったものは、新型コロナウイルス感染症だけではありません。私たちにとっていよいよ現実のものとなった、ChatGPT をはじめとする生成 AI とその技術の驚くべき発展が社会に強烈なインパクトを与えています。教育分野への影響も無限かと思われるほど未知数で、まるで、深く暗いブラックホールのようなでもあり、恐れ多く人々も少なくありません。

しかしながら、LET は、そうした新たな技術に果敢に挑戦し、教育的見地から、多角的で実証的な研究に裏打ちされた検証や実践を行ってきた学会です。今回もまた、新たな技術の教育面への positive, negative 両面の影響を冷静に検証していくことになるでしょう。LET は、こうした流れをとぎらせることなく、2024 年度全国研究大会のテーマを「令和の教育改革 — 未来の外国語教育をデザインする — Educational Reform in the Reiwa era — Designing the Foreign Language Education of the Future」としました。中部支部をホストに名古屋で開催される本年度の全国研究大会には、多くの会員、また新たな会員の皆さんの奮ってのご参加を願ってやみません。

目次

巻頭言	1
全国研究大会を終えて	2
2023 年度外国語教育メディア学会学会賞受賞者寄稿	4
第 62 回 (2023 年度) 全国研究大会報告	7
2022 年度本部事業報告・決算報告	20
2023 年度本部事業計画・予算	22

全国研究大会を終えて

大会実行委員長 淡路 佳昌 (大東文化大学)

「外国語教育と『技術革新』：変わるもの、変わらないもの」というテーマのもと、2023年8月7日(月)～9日(水)に早稲田大学戸山キャンパスにて開催された全国研究大会は、400名を超える参加者を得て、お陰様で盛況のうちに無事幕を閉じることができました。この場をお借りして、ワークショップ講師、基調講演者、シンポジウム登壇者、発表者および参加者にお礼を申し上げますとともに、大会運営を支えてくださったすべての皆様に感謝いたします。



大会準備を開始した頃は、まだコロナ禍の余韻も濃厚で、対面開催に踏み切るには相当な覚悟が必要だったと記憶しております。数年ぶりの対面開催となり、まず会場の確保に苦心しましたが、幸い、早稲田大学を会場として確保することができました。会場校の先生がたには大変お世話になりました。

画面から出てきた多くの参加者で満たされた会場の雰囲気は、しばらく振りに味わう懐かしい感覚でした。ワークショップはいずれのセッションもほぼ満員で、充実した学びの機会となったと思います。二つの基調講演は、教室での指導に忙しい英語教師が見過ごしがちな視点から多くの気づきが得られる内容で、シンポジウムは、SLA や音声技術の最新情報や、学校現場での活用という観点から、密で噛み合った議論で刺激を受けました。さらに、数多くの研究発表が行われ、参加者の皆様には、大会テーマについて掘り下げて考える機会を持っていただけのことと自負しております。懇親会会場は、空調が追いつかないほどの熱気に満ち、懐かしい面々に加えて新たな参加者も加わり、充実したひとときでした。

大会を終えて半年以上が経過し、ようやくコロナ禍も収束しつつある今振り返ってみると、COVID-19感染爆発当初の混乱と、驚くべき速度で普及したオンラインミーティングが印象に残っています。会議や研究大会等、不可欠な人のつながりは、オンラインをフルに活用して維持されました。前回大会でも、延期やオンライン開催など、運営に携わった方々のご苦労が偲ばれます。

今回の大会で対面開催に向けて準備を進める中、ある意味でそれとは逆の苦労がありました。あっという間に普及して浸透したオンライン方式の陰で、それまで毎年培ってきた対面開催のノウハウが薄れつつあることに驚きました。バーチャルルームを設定する代わりに、人の動線を考慮して会場を設定し、必要な掲示を出し、発表を割り振るなど、対面特有の泥臭い作業に苦心しながら、不思議と懐かしい感覚を覚えました。人間の柔軟性と対応力は驚くべきものです。

今回は、対面開催ではあるものの、参加登録プロセスをすべてオンライン化して事前登録をお願いしたことや、大会要項をPDF化してペーパーレスで配布したことなど、コロナ禍で得られた経験に基づいてデジタル化を一步進めた点もありました。一方、開催方式については、コロナ禍で培ったオンラインのノウハウを活かし、ハイブリッド開催という可能性も検討しましたが、品質と安定性を保証しつつ実施するには、対面開催以上の人的リソースが必要になるため、今回はコロナ感染等の緊急対応策として、発表者

の自己責任でオンライン経由での発表会場をいくつか設置するのが精一杯でした。オンラインからの発表視聴を実現するにも、参加費はどうするか、質疑は対面会場とどのように連携できるかなど、解決すべき課題が多く見つかりました。遠方からの参加などの利点を考えると、単純に全面的に対面に戻るのが最善とも言えない部分もあり、これらは今後の課題として引き続き取り組む必要があります。テクノロジーを研究対象とする本学会が、本領を發揮できる領域であるかもしれません。

2023 年度外国語教育メディア学会学会賞受賞者寄稿

学術賞

受賞者：中田達也氏（立教大学）

対象業績：テクノロジーを使用した外国語語彙学習に関する研究

論文賞

受賞者：中西のりこ氏（神戸学院大学）・峯松信明氏（東京大学）・桐原卓弥氏（東京大学大学院生）

対象業績：未習パッセージを用いた英語シャドーイングの効果ーリスニング力およびスピーキング力との関係ー

学術賞を受賞して

中田達也（LET 関東支部、立教大学）

この度は外国語教育メディア学会の学術賞という非常に名誉ある賞を頂き、大変光栄に存じます。推薦くださった理事の先生、ならびに学会賞選考委員の先生方にお礼申し上げます。

私の今までの歩みを振りかえってみますと、LET では多くの貴重な経験をさせていただいたことに気づきます。例えば、私のはじめて学会発表をしたのは、大学院生として参加した LET の関東支部大会でした（山内豊先生・太田洋先生との共同発表）。全国規模の大会で初めて発表したのも、LET の全国大会でした（水本篤先生との共同発表）。はじめてシンポジウムに呼んでいただいたのも、LET の関西支部大会でした（新谷奈津子先生・斉藤一弥先生・鈴木祐一先生とのシンポジウム、通称「奈津子の部屋」）。LET からは、研究者としての基礎を教えてくださいました。

2015～2018 年度まで関西大学外国語学部の教員として過ごした思い出の地である大阪では、LET 関西支部のメソドロジー研究部会や、基礎理論研究部会の先生方に大変お世話になりました。このように、私にとって特別な存在である LET から賞を頂き、非常にうれしく思っております。

受賞対象の業績「テクノロジーを使用した外国語語彙学習に関する研究」について、概要を紹介させていただきます。テクノロジーを使用した外国語語彙学習に関して、私がこれまでに行ってきた研究は、大きく 2 つに分けられます。

1 つ目が、外国語の単語学習に関するものです。具体的には、コンピュータを用いて単語を学習するう



えて、練習の種類・頻度・スケジュールなどの諸要因が与える影響について、研究を行ってきました。研究成果は、ジャーナル論文や、書籍『英単語学習の科学』（2019年、研究社）としてまとめることができました。

2つ目が、外国語の定型表現学習に関するものです。「語彙学習」というと、「個別の単語を覚えること」と捉えられることが多いようです。しかし、近年の研究では、イディオムやコロケーションなどの定型表現が、外国語の学習・処理・使用において重要な役割を果たすことが示されています。そのような認識に基づき、テクノロジーを使用した定型表現学習に関する研究にも取り組んでいます。研究成果は、ジャーナル論文や、書籍『英語は決まり文句が8割—今日から役立つ「定型表現」学習法—』（2022年、講談社現代新書）として発表してきました。

最後になりましたが、このような機会を与えてくださった外国語教育メディア学会、そして日頃からご支援を賜っているすべての方々に改めて心から感謝申し上げます。これからも、LETの活動を通していただいたご恩を少しでもお返しできるよう、一層の研究活動に励んでまいります。今後とも変わらぬご指導を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

論文賞を受賞して

中西のりこ（LET 関西支部、神戸学院大学）

この度は、栄誉あるLET論文賞をいただき、誠にありがとうございました。

はじめに、たいへんご丁寧なアドバイスと励ましのお言葉をくださった査読者および「外国語教育メディア学会機関誌」編集委員の先生方に感謝申し上げます。ご指摘に沿って論文中の用語を整理するにつれ、焦点を当てるべき内容が初校提出時よりもいっそう明確になりましたし、温かい励ましのおかげさまで、自分たちの研究に対して自信を持って論文を仕上げることができました。

この論文は、大学生が夏休み中に取り組んだ42日間の「シャドーイング・マラソン」という活動の様子と、彼らのリスニング力・スピーキング力の推移との関係をまとめたものです。この研究では、集中的にシャドーイングトレーニングを継続することが、参加者の英語リスニング力と発音と語彙に関するスピーキング力の向上に寄与することが明らかになりました。一方で、モデル音声の韻律的な特徴を真似る力には有意な効果がないという結果は、この論文執筆時以降のさらなる研究の取り組みへと発展しました。2021年当時に使用したオンラインシャドーイングシステムを改良し、学習者音声の韻律的特徴を自動計測してその場で提示する機能を追加するなど、シャ



ドーイングトレーニングの実践研究は現在も続いています。

このように、様々な教育実践を継続できるのは、授業期間中だけでなく年間を通してトレーニングに自主的に取り組む学生たちのがんばりだけでなく、本学で英語科目を担当しておられる先生方のご理解のおかげさまで。教育実践の場、および、その成果や課題を研究発表や論文執筆という形で報告する場に恵まれ、常に挑戦し続けることができる環境に身を置かせていただけていることを、たいへん幸せに思います。

また、学生がオンラインで提出した音声データの分析は、共同研究者である峯松信明先生と、当時研究室に在籍しておられた桐原卓弥さんによるサポートなしには成しえない作業でした。膨大な量のデータと向き合い、分析手法や結果のまとめ方について議論した毎日を懐かしく感じます。シャドーイング関連だけでなく、これをさらに発展させた研究で現在もご一緒させていただけていることに、改めて、心から感謝いたします。

思い起こしますと、峯松先生との共同研究のきっかけは、2018年に大阪で開催されたLETの全国大会でした。その後、国内外の様々な大会や研究会を通して研究の方向が形になりましたが、共同研究のきっかけを作ってくださったのがLET、研究成果をまとめた論文を評価してくださったのもLETということで、ありがたいご縁を感じています。最後になりましたが、これまでLETの運営に携わってくださった先生方、会員みなさまに感謝の意を申し上げます。

第 62 回（2023 年度）全国研究大会報告

8月7日(月): 第1日

ワークショップ

A 室

(13:30-14:50)

英語教師のための教育 DX・教育 AI 入門

石井 雄隆 (千葉大学)

(15:05-16:25)

学習者データを「見る」: 外国語教師のためのデータの
入力, 分析, 解釈方法

浦野 研 (北海学園大学)

(16:40-18:00)

Google ツール+ChatGPT で教材作成・管理を効率化:

動画利用教材を例として

山内 真理 (千葉商科大学)

B 室

(13:00-14:50)

質的研究における事例研究の方法論

高木 亜希子 (青山学院大学)

(15:05-16:25)

リテリング活動: 音読から話すことへ足場架け

久保野 雅史 (神奈川大学)

(16:40-18:00)

ベイズ統計超入門 (再演)

竹内 理 (関西大学)

湯浅 麻里子 (関西大学大学院)

C 室

(13:00-14:50)

多相ラッシュ分析入門—パフォーマンステストのスコアを分析する

小泉 利恵 (筑波大学)

(15:05-16:25)

発音とプロソディ可視化のための英文マークアップ

~TED トークと歌を題材として~

静 哲人 (大東文化大学)

(16:40-18:00)

デジタル・リーディングのプロセスを捉えるデータ収集方法

土方 裕子 (筑波大学)

8月8日(火): 第2日

研究発表・実践報告

31号館2階203教室

(9:00-9:30)

文書ピアアドバイジングを通じた第二言語学習者の相談とアドバイス内容の混合分析

川崎 美佐子 (早稲田大学 大学院生)

太原 達朗 (早稲田大学)

守屋 亮 (早稲田大学)

本研究発表では、英語を専門としない大学の1・2年生間での匿名化されたオンライン上の文書ピアアドバイジングについて、英語学習の相談およびアドバイス内容を実態調査し、単語・文法等の知識面での学習や時間管理等の学習方法に関する内容が多いことが示された。8名程度の参加者がおり、アドバイス内容の適切さなどについて質問が挙がった。

【報告: 本沢 彩 (関東学院大学)】

(9:40-10:10)

機械翻訳を活用したL2ライティングの新しい可能性

松井 久恵 (米国プリンストン大学)

本実践報告では、米国私立大学の日本語初中級コースの学習者を対象に、機械翻訳アプリ DeepL を校正にのみ活用したL2ライティングの言語活動において、学習者の習熟度によりアプリの支援の効果の程度が異なり、教師による指導の必要性が示された。46名の参加者からはアプリ導入時の説明内容やライティング指導に適切なアプリについての質問が挙がった。

【報告: 本沢 彩 (関東学院大学)】

(10:20-10:50)

Can AI-based chatbots respond appropriately to EFL learners?

KOVALYOVA, Angelina (University of Tsukuba)

The aim of the study was to understand the degree to which chatbots can provide a comfortable conversation experience from a linguistic perspective. The presenter defined chatbots in the beginning and introduced application of the technology into language education. The study evaluated three kinds of chatbot apps as a conversation partner: Replika, Cleverbot and Koddy. It was reported that Replika, a generative-AI-based chatbot, showed the biggest potential with natural and fluent text-based conversation in English while the other pattern-based apps had problems in keeping smooth and appropriate interaction with a human. Questions from the audience include whether or not chatbots could improve effectiveness of language learning, how they could change the learner's perspective of the world. The session was attended by about 15 participants.

【報告: KIMURA, Syuhei (Ritsumeikan University)】

(11:00-11:30)

Padlet と Zoom を活用した eTandem の効果

小林 翔 (大阪教育大学)

平塚 昭子 (University of Technology Sydney)

本研究では、シドニー工科大学の学生と日本の学部生とがインターネットを介した会話パートナーの実践が日本人学生の英会話に対する不安感や意志にどのような影響を与えたかが報告された。eTandem と名付けられたこの取り組みでは、ビデオ会議アプリの ZOOM とグループ掲示板アプリの Padlet を組み合わせて行われた。事後のアンケート調査では不安感が解消された他、話題や情報を共有することが英語によるコミュニケーション意欲にプラスの効果をもたらすこと

が報告された。質疑応答では実施に関わる技術的な課題やトピック選定について尋ねられた。22 名が参加した。

【報告: 木村修平 (立命館大学)】

31 号館 2 階 204 教室

(9:00-9:30)

英語アカデミックライティング指導—「長さ」「語彙」「統語的複雑さ」に注目して

中村 佐知子 (東北大学)

桜井 静 (東北大学)

日本人英語学習者が大学初年度の必修英語の writing の授業にて、15 回参加し、教員による口頭やウェブを通じたフィードバックを受けた結果、writing の分量が増え、バリエーションの豊かな語彙や複雑の構造の使用頻度が高まったことが示されました。参加者は 20 名ほどでした。

【報告: 山口 高領 (秀明大学)】

(9:40-10:10)

オンライン学習コミュニティが及ぼす主体的なライティング学習への効果

久島 智津子 (津田塾大学)

発表者らが開発した web 上にて英語パラグラフライティング支援ツールの狙いが、学習者に個人学習と協働学習を提供し、省察を通して主体的に学ぶことと設定されていました。このツールを使用した大学 1 年生 19 名の学習記録を分析した結果、投稿数や英作文の成績との相関は見られなかったものの、システムツールへの愛着やシステム内のコミュニティへの帰属意識が高まっていることが確認されました。参加者は 12 名ほどでした。

【報告: 山口 高領 (秀明大学)】

(10:20-10:50)

機械翻訳と自動採点ツールを用いたライティング授業: ICT 英語教育の可能性

築地原 尚美 (滋賀県立大学)

ライティング活動に Write & Improve with

Cambridge 或いは Transable を活用すると、いずれの場合においても学生のライティング力は向上した。ただし、文法を修正した際、Transable では必ずしも自動採点のスコアが上昇しないことから、Transable は内容を評価していると推測された。約 50 名の参加者との質疑応答では、口頭発表を含むアウトプットの重要性が議論された。

【報告：近藤 雪絵（立命館大学）】

(11:00-11:30)

デジタル・ワークシートを用いたアカデミック・ライティング・プロセス指導

西川 純恵（日本医科大学）

学習者のライティングプロセスを Google Docs で一元化した「デジタル・ワークシート」の実践が報告された。プロセスと成果をまとめることで、学習者はプロセスの重要性を認識し、教員にとってはフィードバックが容易になる等の効果が認められた。約 30 名の参加者との質疑応答では、多読活動との関連や Google Doc の利点について議論された。

【報告：近藤 雪絵（立命館大学）】

31 号館 2 階 205 教室

(10:20-10:50)

バーチャルエクステンジから実渡航を伴う国際交流につながる学びの循環に関する試み

布施 邦子（大阪公立大学）

ウォレスタッド 千鶴子（大阪公立大学）

本発表は課外ボランティア活動としての VE 活動と協働学習体験に基づいた COIL 型授業が、学習者の異文化や留学につながる「学びの循環」にどのように影響を及ぼすのかに関する実践研究であった。学修経験に関するアンケートと振り返りレポートから、自信の獲得、コミュニケーションストラテジーの体得、米国学生の学習態度に関する気づき、多様性のある環境からの学びなどに関する効果について報告された。フロアからも発音への気づき、企画立案のコツ、動機づけが乏しい学習者への後押しなどについて活発な議論が

展開された。参加者は 16 名であった。

【報告：小野 雄一（筑波大学）】

32 号館 2 階 229 教室

(9:00-9:30)

Suggestions for Using ePortfolios in English Teacher Education

HALL, James(Iwate University)

本報告は、英語教師教育において電子ポートフォリオ (EPs) の有効活用について説明している。EPs は、教師の成長を示す集積であり、反映型の 5 種類のエントリに下位区分される。Eps は、教育実習生 (STs) が知識を共有し、実践と結びつける目的があり、今後の課題は、STs の記録を支援するためのフィードバックやルーブリックと考えた。質疑応答では今後の可能性と有用性の検証についてやり取りがあった。参加人数 11 名。

【奥 聡一郎（関東学院大学）】

(9:40-10:10)

英語教師を目指す大学生の文法指導に関する信条

宮迫 靖静（福岡教育大学）

本研究は大学生の文法指導に関する信念と、中・高等学校の教師や海外の英語教師の信念を比較することを目的とし、結果として、2 年生と 4 年生の間で、文法指導に関するいくつかの信念に有意な差があることが示された。質疑応答では、教育実習前後、教師になったあとでの追跡調査の必要性など継続的な視点の必要性が論じられた。参加人数 16 名。

【奥 聡一郎（関東学院大学）】

(10:20-10:50)

TED Talks を使用した遠隔授業でリスニング力は向上するか？—英語力の低い大学 1 年生を対象に—

長谷川 修治（植草学園大学）

大学英語必修科目で TED Talks を使用した遠隔授業が、英語力の低い学生のリスニング力向上に与える学習効果について調査した。その結果、遠隔授業でも学生の興味関心や英語レベルに合わせて活用できるこ

と、英語力の低い大学生に対してもリスニング力の養成が可能になることを示唆した。その際、教員による丁寧な準備や工夫が学生の積極的取り組みを促すことも示した。参加人数：16名

【報告：今井由美子（同志社女子大学）】

(11:00-11:30)

シャドーイングによる日本語発音習得に関する一考察—上級学習者を対象として—

大久保 雅子（早稲田大学）

日本語発音習得のためのシャドーイングを通し、学習者がどのように自らの学びに気づきを得、発音修正・習得するかを調査した。課題録音音声と振り返りシートの分析から、振り返り活動で自己の問題点に関する気づきが得られ、そこで問題点が修正され習得が促されることを報告した。気づきがない場合は問題点を自ら修正できないということの指摘があった。参加人数：16名

【報告：今井由美子（同志社女子大学）】

32号館2階228 教室

(9:00-9:30)

国際語としての英語と Best-Fit Strategy: A

Crossroad Between Self-Regulation and Learner Strategies

若本 夏美（同志社女子大学）

今井 由美子（同志社女子大学）

大塚 朝美（大阪女学院大学）

授業内・授業外での学習と学習理論についての明示的学習を有機的に関連付けた改良版 **Strategying** モデルに基づき、学習者が自身に最適な学習ストラテジー (Best-Fit Strategy; BFS) を見つけるトレーニングの実践の成果が報告された。授業外で学習を継続することは難しく、授業外トレーニングの課題が明らかとなった一方で、質問紙調査の結果からは英語能力や自己効力感の向上など、肯定的な回答も多く見られた。質疑では、性格と BFS の関係性について活発な議論が行われた（参加者 23 名）。

【報告：田村 祐（関西大学）】

(9:40-10:10)

学習者視点でみるタスクの繰り返しと振り返りの有用性検証

羽尾 将司（関西大学 大学院生）

タスクの繰り返し、発話の書き起こしと自己修正、教員からのフィードバックなどを組み合わせた指導を受けた学生が、それらの指導についてどのように感じていたのかを質問紙によって調査した結果が報告された。評定値データでも学習者は一連の指導の有用性を感じており、自由記述でもパフォーマンスの向上や知識の定着などを理由に有用性を感じていることが明らかとなった。質疑では学習者の具体的プロファイルやフィードバック、書き起こしなどの具体的な実践方法について活発な議論が行われた。

【報告：田村 祐（関西大学）】

(10:20-10:50)

Excel ワークシートを利用した簡易型クイズのための関数式とその改良

神谷 健一（大阪工業大学）

本発表は、発表者が代表を務める教材開発グループで用いている語彙テスト（クイズ）を効率的に実施、評価を行うための関数式を紹介するものであった。グループで作成する教材は、「LEVOA」と言い、VOA Learning English を利用して、本文に含まれる語彙のテストを実施するものである。本教材は Excel で作成されており、簡便に利用することができるが、記号類の入力などによって、一部が正しく採点されないという問題があった。今回、その問題を改良し、従来の採点トラブルは解消したが、あらたに自動補完入力機能が作動するなどのトラブルが生じているという報告があった。おもなコメントとしては、ハッシュ関数の利用の提案があり、語彙力が不足している学習者に対する足場掛けなどについての質問がなされた。本発表への参加者は 14 名であった。

【報告：金丸 敏幸（京都大学）】

(11:00-11:30)

単語テストに意味はあるのか：単語テストと TOEIC®スコアの関係

狩野 紀子 (拓殖大学)

本発表は、市販の単語集を用いた単語テストの点数と TOEIC®スコアに相関があるかどうかという課題に対し、単語学習への取り組みの差がスコアの違いに繋がるかどうかを調査したものであった。単語テストの平均点と TOEIC®スコアについては、前期・後期ともに相関が認められた。習熟度別の相関については、初級者群のみに相関が認められ、学習者の習熟度が上がるにつれて、単語集による暗記学習の効果は減少するという結果となった。発表後には、習熟度別の群の分け方という統計処理に関する質問や、指定されたもの以外での単語学習の有無や単語の難易度など学習内容に関する質問などがあった。本発表への参加者は40名であった。

【報告：金丸 敏幸 (京都大学)】

32 号館 2 階 227 教室

(9:00-9:30)

関与負荷仮説に基づく空所補充および多肢選択式問題の比較：ベイズ推定による同質性の検討

小室 竜也 (筑波大学 大学院生)

本研究では、文レベルおよび文章レベルの空所補充問題と文章レベルの多肢選択式問題という3つの付随的語彙学習活動の効果を、ベイズ推定を用いて比較された。結果として、これらの活動の効果は実質的に差が見られなかった。目標語の品詞の違いや語数による影響が指摘され、活発に議論された。参加者は約10名であった。

【報告：朝熊 悠 (関東学院大学)】

(9:40-10:10)

派生形態論的知識の複数側面間の関連性

森田 光宏 (広島市立大学)

阪上 辰也 (広島修道大学)

鬼田 崇作 (同志社大学)

高橋 有加 (広島大学)

本研究では、派生形態論的知識について、Morphological Awareness と Morphological Knowledge の2種類のテストの結果から、双方で測定される知識がどのような関係にあるのかが検討された。複数のモデルを比較した結果、MK と MA は派生形態論的知識の異なる側面であると分かった。TOEIC との関係や小学校英語での活用方法等が議論された。参加者は約20人であった。

【報告：朝熊 悠 (関東学院大学)】

開会行事・総会・学会賞表彰式

司会：下山 幸成 (外国語教育メディア学会関東支部長・東洋学園大学)

研究発表・実践報告

31 号館 2 階 203 教室

(13:40-14:10)

学生は Machine Translation から何を学ぶのだろうか？—外国語教育における MT 活用の可能性—

山下 美朋 (立命館大学)

大学生を対象に、自身の英文を同内容の MT 訳と比較して修正する実践が行われた。MT 訳を受け入れた学生は文法や語彙の誤りが少ない傾向があった。一方、受け入れなかった学生は、人によるフィードバックを通じて、より学習が促される傾向があった。文法や語彙、内容に関する指摘が書いた英文を振り返る機会となっていた。参加者 59 名。

【報告：藤永 史尚 (近畿大学)】

(14:20-14:50)

Impact of a Login System and Motivational Tools on the Usage of Online EFL Practice Tools

SPRING, Ryan (Tohoku University)

TAKEDA, Jessie (Tohoku University)

Tohoku University moved its EFL materials to a website with vocabulary tools, feedback, and speech

recognition. In 2023, a log-in system was added for personalized experiences, tracking, a leaderboard, and rewards. Surveys indicated students felt more engaged with the updated site. Comparisons between survey responses and actual tool interactions revealed moderate accuracy in student self-reporting. A preliminary relationship was observed between tool engagement and end-of-semester test scores. (Number of participants: 14)

【報告: SEKITANI, Koki (Toyo Eiwa University)】

31 号館 2 階 204 教室

(13:40-14:10)

クラウド型 Writing 指導ソフトウェアを導入して：利点・課題点・今後の展望

伊庭 緑 (甲南大学)

Criterion®の実践報告。2020 年度以前は2～3点が目立ったが、2021 年度以降、パラグラフの構成要件（特に形式と語数）を集中的に学習させたところ、5～6点が目立つようになり、学生の Motivation も向上したとの報告があった。形式面は Criterion®が判定しているものの、内容面については教員が丁寧に見る必要がある。質疑応答では形式の学習だけでこれだけ点数が上がるのか、バージョンアップはしていないのかといった議論が行われた。参加者数 20 名。

【報告：神谷 健一 (大阪工業大学)】

(14:20-14:50)

GPT と Google スプレッドシートを利用した英語ライティング評価通知書の生成と活用

尾関 修治 (名古屋大学)

GPT による教室英語ライティング評価の効率的な処理と学習者への動機づけに役立つかどうかを目的とし、受講生一人一人に評価通知書を紙に差し込み印刷して配布する手法の紹介があった。Google スプレッドシートから GPT 関数を利用。ただし同じ作文を 30 回採点させた場合でもかなりのばらつきがあるという報告があった。参加者数 60 名。

【報告：神谷 健一 (大阪工業大学)】

31 号館 2 階 205 教室

(13:40-14:10)

The Impact of Interaction with Young Native Speakers on Students' Cross-Cultural IQ and Worldview

OBARI, Hiroyuki (Aoyama Gakuin University, Emeritus)

(14:20-14:50)

英語ディベート活動が高校生の批判的思考態度に及ぼす影響

小林 良裕 (東京学芸大学 大学院生)

32 号館 2 階 229 教室

(13:40-14:10)

インタラクティブな韻律可視化・スコア化を伴うオーバーラッピング型音声訓練とその効果

峯松 信明 (東京大学)

中西 のりこ (神戸学院大学)

音声の input 力と output 力を向上させるオンライン教材の使用結果が報告された。12 週間を 3 期に分け、Shadowing と Overlapping による訓練を課し、モデルと学生の長さ/強さ/高さの音声類似性を可視化した。どれも向上したが、3 期の最後の読み上げの高さ制御は 1 期とほぼ等しかった。高さについては variation が多様である為、モデルと同じに再現するのは難しいのではないかという議論がなされた。参加人数の概数：36

【報告：古村 由美子 (名古屋外国語大学)】

(14:20-14:50)

大学英語教育における発音矯正アプリ「ELSA Speak」の導入と学生の意識調査

近藤 雪絵 (立命館大学)

阪上 潤 (立命館大学)

木村 修平 (立命館大学)

「ELSA Speak」を、任意の自主学習教材として活用

した結果が報告された。活用頻度については、継続できた学生が少なく、Pre/Post 両方の質問紙に回答した 28 名を比較したところ、英語の発音への自信が post で減少していた。診断テスト結果は、発音・抑揚は上昇したが、流暢性は減少した。英語の発音に関して授業と関連付けた学生がいた為、今後は授業の発表と ELSA の活用を関連付け利用率を保ち、調査を継続する。参加人数の概数：38

【報告：古村 由美子（名古屋外国語大学）】

32 号館 2 階 228 教室

(13:40-14:10)

SDGs 意識を通じたタスク中心型言語指導とライティング・スピーキング活動

長岡 穂（西武文理大学）

SDGs 意識を通じた課題解決型アクティブラーニングを、大学生 112 名（サービス経営学部）に実践した研究であり、ライティングやスピーキング能力を向上させるための 5 つの Task が導入された。明示化されたタスクの遂行により評価が明確となり成績が向上したことが報告された。参加者は 20 名で、主に SDGs に関する課題作成や評価方法に関して質問が行われた。

【報告：飛田ルミ（足利大学）】

(14:20-14:50)

シャドーイングの効果および理論的背景の検討：リスニング能力

向上および連語表現記憶に焦点を当てて

橋崎 諒太郎（名古屋大学）

シャドーイングの最適な反復回数、および復唱速度向上と連語表現の記憶との関連性を検証するため、大学 1 年生 72 名に対し 14 回の授業に音読や並び替えタスクを含むシャドーイングが導入され、リスニングテストなどのデータは GLMM と LME により分析された。その結果、反復回数は 5-6 回以上でも効果的であるという可能性と、連語表現記憶は復唱速度の向上によって達成されるという理論背景が支持されたことが報告された。参加者は 32 名で、タスクや課題の

検証方法などに関して活発な質疑応答が行われた。

【報告：飛田ルミ（足利大学）】

32 号館 2 階 227 教室

(13:40-14:10)

Life is Long, Challenging, and Unpredictable Like a Journey: Processing Metaphorical Meaning in a Second Language

IKUTA, Miki (Nagoya University, JSPS Research Fellow)

AL-AZARY, Hamad (Lawrence Technological University)

MIWA, Koji (Nagoya University)

第二言語でのメタファーの理解は難しく、誤解を招くことがある。日本人の英語上級者のメタファーの解釈を第一言語話者と比較したという研究であった。第二言語話者と第一言語話者の解釈には一部重複があったが、第二言語話者の方が多様な解釈を行っていた。研究に使用したメタファーの種類や構造について質問があった。聴衆は 8 名であった。

【報告：天野 修一（広島大学）】

(14:20-14:50)

自己ペース読み課題において誤りが他の文の読解に及ぼす影響

ー日本語副詞に関する誤りを用いた検討ー

坂東 貴夫（金沢学院大学）

教育上の重要度を特定する試みなどの理由から、第二言語の誤りに関する研究は長年行われている。本研究は日本語の副詞の誤りが読解に与える影響を調査した。日本語を母語とする大学生が事前アンケート後、ランダムイズされた誤文や正文を読解し、処理時間を計測した。その結果、副詞の誤りが読解時間に影響する可能性が示唆された。なぜ自己ペース読み課題を採用したのか、という質問があった。聴衆は 7 名であった。

【報告：天野 修一（広島大学）】

基調講演 1

【報告：関谷 弘毅（東洋英和女学院大学）】

A I時代の外国語教育—認知科学からの提言

今井むつみ（慶應大学環境情報学部）

ChatGPT など AI との付き合い方に留まらず、今井先生の豊富な実験データや知見をもとにした、我々英語教育に携わる者への刺激に満ちた講演で、会場はほぼ満席であった。冒頭から「知識には生きた知識と死んだ知識がある」という話題の中で、英語教師が日々良かれと思って行っている指導方法や活動が、実は「死んだ知識」を与えているだけなのかもしれないと深く考えさせられた。さらに、スキーマを形成することはいかに大変な作業であるか、経験に設置していない基本概念は学習者に残らないので、それらを体で納得するまで根気よく学ぶことが重要という指摘も、従来の学習の効率が上がらない理由として思い当たる。現在では当然の方針と思われる、「コミュニケーション重視」「通じればいい」という風潮に対して、それだけではスキーマの構築も学習も起こらないという警鐘も心に響いた。質疑では、スキーマを形成することの難しさについて意見が交換された。

【報告：淡路佳昌（大東文化大学）】

研究発表・実践報告

31号館2階203教室

(16:10-16:40)

動画配信サービスを利用した EFL 学習者向け半自律的学習とその学習成果

松井 夏津紀（京都先端科学大学）

動画配信サービスを利用した EFL 学習者の半自律的学習手法「Video Report_MPL (改)」を提案した。具体的には、動画を選び、日本語字幕後、英語音声で繰り返し視聴し、シャドーイング練習を行い、学習者同士で情報も共有する。意識調査の結果、映画やドラマを好む傾向が見られ、視聴・シャドーイングの効果を実感していることがわかった。（参加者：11名）

31号館2階204教室

(16:10-16:40)

フレームワークを用いたライティング指導の在り方について：スローラーナーに寄り添った表現指導の在り方

松木 龍太（大阪学院大学高等学校）

本発表では、発信能力向上を目標に実施した授業実践及び評価方法が報告された。高1を対象に、Input 活動から最後は Essay writing を行うフレームワークを用い、Essay の構成内容を段階的にレベルアップする実践を行った結果、平均使用語数、GTEC スコア、Writing への態度に向上が見られた。フロア（3名）からは具体的な指導方法について質問が出された。

【報告：近藤 睦美（甲南女子大学）】

31号館2階205教室

(16:10-16:40)

オンライン国際交流において AI 自動翻訳ソフトの支援を受けた日本人学生の心的影響

安西 弥生（国際基督教大学研究員 / CRET）

北澤 武（東京学芸大学大学院 / CRET）

32号館2階229教室

(16:10-16:40)

英語科デジタル教科書における発音指導・学習支援機能についての横断的調査分析

青木 浩幸（国際基督教大学）

辻田 麻里（国際基督教大学）

本発表では令和3年度の中学校英語教科書発行者全6社の指導者用デジタル教科書を対象として、特に音声関連の機能に注目した分析と教員に対するヒヤリングによる評価を合わせて、有効に使うための知見と課題が報告された。複数の出版社からの情報共有の希望とともに、どの程度の学校で持ち帰りが認められているのかといった質問があった。参加人数約20名。

【報告：山本 勝巳（流通科学大学）】

32号館2階228教室

(16:10-16:40)

美術科高校における ESP 教育～ICT を活用したプレゼンテーション活動の実践とその成果～

出尾 美由紀（大阪府立港南造形高等学校）

美術を専門とし、英語に苦手意識を持つ生徒が多い高校にて、生徒自身の作品を英語で紹介させる取り組みに関する報告が行われた。スモールステップで原稿の作成から発表活動までを導き、その結果、英語に対する意識が前向きになったことが報告された。参加者数は5名だったが、発表題材や話しの組み立て方などについて議論が交わされた。

【報告：植田 正暢（北九州市立大学）】

32号館2階227教室

(16:10-16:40)

辞書検索行動の分析3：英語力と辞書検索関係の質的分析

小山 敏子（大阪大谷大学）

名部井 敏代（関西大学）

推定語彙サイズ、英語基礎力に差がある大学生2名を実験協力者として、語彙・文法問題解答時の辞書検索行動を調査した。両名とも正答率、検索語数に大きな差はなく、学習者の検索行動の多様化が示唆された。質疑応答では、高校時代の辞書使用に関する質問等があり、発表者から詳しい説明がなされた(参加者13名)。

【報告：大久保雅子（早稲田大学）】

公募シンポジウム

外国語教育研究における再現可能性の検証：ベイズ統計を用いた再分析・直接的追試・概念的追試

鬼田 崇作（同志社大学）

草薙 邦広（県立広島大学）

星野 由子（千葉大学）

磯田 貴道（龍谷大学）

大和 知史（関西大学）

山内 優佳（広島大学）

本公募シンポジウムでは、「外国語教育研究における再現可能性の検証：ベイズ統計を用いた再分析・直接的追試・概念的追試」というタイトルのもと、外国語教育研究において再現可能性問題に取り組んだ3つの研究（リーディング、スピーキング、リスニング）について発表を行った。シンポジウムには30名程度が参加され、個別の研究内容についての質問、プロジェクト全体の再現可能性についての質問があり、フロアの先生方と議論を行った。

【報告：鬼田 崇作（同志社大学）】

8月9日（水）：第3日**研究発表・実践報告****31号館2階203教室**

(9:20-9:50)

MOOCs を活用した反転授業における問題解決学習：実践と評価

安部 由美子（広島工業大学）

小林 和歌子（日本大学）

James A. Elwood（明治大学）

本研究の目的は、国際協調的な問題解決学習が、コミュニケーション意欲、自己効力感、動機づけ、課題解決能力、英語学習成果を高めるかどうか、それらの要因の関係性、および課題解決能力に他の4要因が及ぼす影響を検討することであった。参加者は、日本人大学生78名とフィリピンの大学生20名であった。SDGsに関するテーマで、ZOOMによるビデオ通話を使ったディスカッションを連動させた実践を一定期間行った結果、自己効力感、コミュニケーション意欲、動機づけが高まった。また、問題解決志向、自己効力感、コミュニケーション意欲、動機づけには正の相関関係があることが示された。

【報告：小島 ますみ（岐阜市立女子短期大学）】

31 号館 2 階 204 教室

(9:20-9:50)

電子掲示板の匿名性を活かしたコメントフィードバックの
英語ライティングに対する影響

阿久津 仁史（中央学院大学）

飯野 厚（法政大学）

参加人数：20 人。電子掲示板の匿名性が英語ライティングへのコメントフィードバックに与える影響が、実践的に検証された。結果として、匿名性活かしたコメントフィードバックが、英語ライティングに影響することが確認された。質問：匿名性を利用する際に注意すべきポイントはあるか？

【報告：三上 仁志（中部大学）】

32 号館 2 階 229 教室

(9:20-9:50)

学習者用デジタル教科書の効果：音声指導から読むこと・書くことの指導へ

高橋 美由紀（愛知教育大学）

柳 善和（名古屋学院大学）

学習者用デジタル教科書を使用した英語授業についての実践報告がなされた。発表では実際に、動画などのアニメーションを使い、音声読み上げ機能を用いた授業の様子が披露された。小学校で教鞭をとられている先生方を含め 19 名の参加があり、質疑応答では「インプットはクラス内で、アウトプットはクラス外でできるか」や「児童が英語でコミュニケーションをとろうとする態度に変化は」といった質問がなされ、活発なやり取りが行われた。

【報告：新田 よしみ（福岡大学）】

32 号館 2 階 228 教室

(9:20-9:50)

文法的に複雑になるとスピーキングの評価は上がる

か？

近藤 悠介（早稲田大学）

阿部 真理子（岡山大学）

第二言語の話し言葉において、T-Unit に基づく「伝統的な」特徴量と「粒度の高い」特徴量のどちらが評価の予測において有効かを検証するとともに、統語的な複雑性をパフォーマンス評価に用いることの妥当性を検討した。分析の結果、伝統的な特徴量よりも詳細な特徴量の方がパフォーマンスのスコアの予測精度が高い可能性が示され、また節の複雑さより句の複雑さの方が評価をよりよく予測することが示唆された。参加者は 28 名であった。

【報告：工藤 泰三（名古屋学院大学）】

32 号館 2 階 227 教室

(9:20-9:50)

Investigation on Japanese Learners' Perception of L2 Vocabulary Mobile Learning: A Perspective of Deep Learning Approach

GUO, Jingshu (Graduate Student, Kyushu University)

基調講演 2

AI による英語教育の商品化と格差の拡大を防ぐ
—テクノロジーは人権尊重のために—

柳瀬 陽介（京都大学国際高等教育院）

AI の教育、特に英語学習への影響とそれを踏まえた英語教育の長期的指針 vision を示す講演であった。まず、講演者による AI を活用した授業実践の報告があり、さらに他の教育現場での AI 活用の事例等も含め、AI 活用の実態に批判的考察が述べられた。次に、そうした実情を踏まえ、英語教育とその成果である「英語力」の商品化、つまり、過度の数値化とその数値の過度の通用性への危険を指摘し、そこから生まれる社会の格差拡大につながる AI 利用を阻止すべきと訴えた。講演者の主張は、これとは反対に自律的学習を推

し進め、学習者一人ひとりの尊厳と権利を尊重することに AI が資するべきである、というものである。最後に、英語教育も学習者の真の幸福、自由と平等を促進させるという方向性を見失ってはならない、と力説された。質疑応答では、AI singularity 時の AI とヒトとの違いへの問いがあり、講演者の答えは、それが来ても両者の「知性」は違うであろうとのことであった。また、「テスト」の実情と本来の目的についても話題にされた。参加者は約 200 名。

【報告：森田 彰（早稲田大学）】

オンデマンド配信型発表 Q&A セッション

31 号館 2 階 203 教室

(11:10-11:40)

近年のクラウド型 TTS 音声合成サービスの急速な進化について

東 淳一（神戸学院大学）

近年急速に進化しているクラウド型 TTS 音声合成サービスとして、Amazon Polly, Google Cloud, Microsoft Azure, Elevenlabs, IBM のサービスが紹介され、機能等の比較がなされた。これらのサービスでは、ニューラル音声の増加が顕著である。GUI 環境で合成音声を作成できる点や、音質、SSML 等を使った韻律制御が可能な点、局所的に発話スタイルの変更が可能な点などから、Microsoft と Elevenlabs の優位性が示された。教材作成場面での活用方法がデモを通じて示された。

【報告：小島 ますみ（岐阜市立女子短期大学）】

31 号館 2 階 204 教室

(11:10-11:40)

Effects of Cultivating Positive Interdependence Through Team-based Learning

YASUNAGA, Akie (Tokyo Denki University)

The number of attendees: 10. This study investigates the effects of team-based learning (TBL)

in English education in Japan. It demonstrates TBL's successful integration into language education through a 28-week intervention across three general English courses. Survey data reveal enhanced positive interdependence and team cohesion among participating students throughout the learning process.

【報告：Hitoshi Mikami (Chubu University)】

31 号館 2 階 205 教室

(11:10-11:40)

Developing the Japanese Version of the Sun and Rueda (2012) Online Learning Engagement Scale

ALIZADEH, Mehrasa (International Professional University of Technology)

オンラインでの英語学習者がエンゲージメント（学習への関わり）のレベルを自己申告するリッカート尺度を開発するために行われた、31 人の日本人学部生への質問紙調査分析にて、高い関心と満足度が信頼係数アルファを基に確認され、インタビュー調査によってもその傾向が確認されたとの報告がされました。

【報告：山口 高領（秀明大学）】

32 号館 2 階 229 教室

(11:10-11:40)

小学校英語の発音指導：教科書と付属資料の課題

河内山 真理（関西国際大学）

有本 純（関西国際大学）

小学校 5、6 年生用の英語検定教科書 7 種類と教授用資料一式を比較した研究発表である。音声や発音指導は、教科書によって説明のされ方に差がみられ、文字指導がメインで発音指導をあまり取り扱っていない教科書もあったという結果が報告された。24 名の参加があり、「音声指導に慣れていない先生が多いのではないか？」やチャンツについての質問やコメントが出された。

【報告：新田 よしみ（福岡大学）】

32号館2階228 教室

(11:10-11:40)

シャドーイング訓練によるスピーキング力の伸張を測るのに適したスピーキング・テスト形式に関する実証的研究

山内 豊 (創価大学)

峯松 信明 (東京大学)

西川 恵 (東海大学)

発音・韻律の習得を促進し、リスニング力やスピーキング力を伸長させるとされるシャドーイングであるが、本研究はそのパフォーマンスを最もよく反映するのはどのようなテストなのかを明らかにしようとするものである。分析の結果、絵を描写する問題、質問に回答する問題、意見を述べる問題のうち、質問に回答する問題が最もよくパフォーマンスを反映することが示唆された。参加者数は28名であった。

【報告：工藤 泰三 (名古屋学院大学)】

32号館2階227 教室

(11:10-11:40)

A Corpus-Based Study on the Use of Formulaic Sequences in English Textbooks: Examining Their Functions and Grammatical Structures

MIKAJIRI, Noriaki (Tokyo University of Foreign Studies Graduate School Student)

全体シンポジウム

司会：本沢 彩 (関東学院大学)

外国語教育と「技術革新」：変わるもの、変わらないものの

峯松 信明 (東京大学)

バトラー 後藤 裕子 (ペンシルバニア大学)

奥住 桂 (埼玉学園大学)

本シンポジウムでは、外国語学習に関するテクノロジー、第二言語習得、教育実践の専門家をパネリストに招き、様々な革新技術が浸透してきている外国語教

育における「変わるもの」と「変わらないもの」を多角的に議論した。まず、話題提供では、峯松信明先生より、外国語の音声習得支援に関する最新のテクノロジーでは比較的表層的な会話までは行える段階にあることが示された。バトラー後藤裕子先生からは、テクノロジー使用により学習者が身に付けるべき能力が変化する一方、コミュニケーションの本質や教師や保護者の役割は変化しないことが説明された。そして、奥住桂先生からは、学校現場のテクノロジーの変化とそれに伴う指導・学習方法の変化の説明があり、学校現場におけるテクノロジー活用には限界があり、教師の役割の重要性が変わらないとの主張があった。ディスカッションでは、外国語教育においてテクノロジーを活用するために、教員が意識すべきこと、身に付けておくべきことについて、各パネリストの意見を伺うとともに、「はじめの一步」として何から取り組んだらよいかご提案いただいた。質疑応答では、chatGPTの適切な活用方法やICTを活用した英語でのコミュニケーション活動の具体などについて質問が挙がった。

【報告：本沢 彩 (関東学院大学)】

閉会行事

司会：下山 幸成 (外国語教育メディア学会関東支部長・東洋学園大学)

2022年度 本部 事業報告

1. 開催行事関連

第61回全国研究大会

ライブ配信：2022年8月9日（火）～8月11日（木）

2. 総会

開催日：2022年9月12日（月）

開催場所：Web 会議システム

3. 出版・広報関係

- 1) 全国ホームページを利用した広報
- 2) 全国メーリングリストを利用した広報
- 3) LETblog の発行（毎月1回発行）
- 4) Newsletter No. 101 の発行（Web 上で2023年3月公開）

4. 運營業務関連

- 1) 支部長連絡会の開催：2022年8月27日（土） Web 会議システム
- 2) 理事会の開催：2022年8月27日（土） Web 会議システム
- 3) 会長・副会長会議の開催：2023年1月29日（日） Web 会議システム

5. 学会機関誌

Language Education & Technology 第59号 2022年8月31日（水）J-STAGE で公開

6. 学会賞

該当者無し

7. その他

賛助会員に対するバナー広告の無料開放

以上。

2022年度 外国語教育メディア学会本部 決算報告書

2023年7月8日

自2022年4月1日～至2023年3月31日

項目	予算額	決算額	内 訳
前年度繰越金	2,371,016	2,371,016	
賛助会費	1,150,000	1,200,000	50,000円 × 24件
一般会費	1,199,000	1,199,000	前年度各支部会費収入 × 0.18
雑収入	0	24	銀行利子
収益計(①)	2,349,000	2,399,024	
法人化準備積立金	92,400	92,400	
収入計(③)	2,441,400	2,491,424	

費 目	予算額	決算額	内 訳
印刷費	377,300	377,300	機関誌59号
通信費	50,000	0	
ネットワーク関係費	700,000	547,800	本部サーバー管理・業務委託料・ドメイン維持料など
旅費交通費	250,000	0	
会議費	25,000	0	
全国研究大会開催費	500,000	176,000	全国研究大会ホームページ作成(アセット)
事務費・業務委託費等	500,000	0	
国際交流委員会費	20,000	0	
雑給	0	0	
事務用品費	50,000	0	
支払手数料	8,000	1,510	
雑費	50,000	0	
費用計(②)	2,530,300	1,102,610	
法人化準備積立金	92,400	92,400	
支出計(④)	2,622,700	1,195,010	

当期利益 【収益(①)－費用(②)】	-181,300	1,296,414	
次年度繰越金 【前年度繰越金＋当期利益】	2,189,716	3,667,430	

当期収支 【収入(③)－支出(④)】		1,296,414	
-----------------------	--	-----------	--

以上、報告します。

外国語教育メディア学会本部事務局

事務局長 千葉 敦

以上、相違ありません。

2023年7月26日

会計監査

奥山慶洋 

会計監査

森好紳 

2023年度 本部 事業計画

1. 開催行事関連

第62回全国研究大会

日程：2023年8月7日（月）～9日（水）

会場：早稲田大学戸山キャンパス

大会テーマ： 外国語教育と「技術革新」：変わるもの、変わらないもの

Language Education Tradition Meets Innovation: Honoring Heritage, Embracing the Future

2. 総会

開催日：2023年8月8日（火）

開催場所：早稲田大学戸山キャンパス

3. 出版・広報関係

- 1) 全国ホームページを利用した広報
- 2) 全国メーリングリストを利用した広報
- 3) LETblog の発行（毎月1回発行）
- 4) Newsletter No. 102 の発行（Web 上で2024年3月公開）

4. 運営業務関連

- 1) 支部長連絡会の開催：2023年8月7日（月） 早稲田大学早稲田キャンパス
- 2) 理事会の開催：2023年8月7日（月） 早稲田大学早稲田キャンパス
- 3) 会長・副会長会議の開催：2024年1月下旬

5. 学会機関誌

- 1) Language Education & Technology 第60号 2023年8月 J-STAGE で公開
- 2) Language Education & Technology 第61号
 - ・ 投稿申し込み締切：2023年8月31日（木）
 - ・ 応募論文提出締切：2023年11月30日（木）
 - ・ 応募論文結果通知：2024年3月

7. 学会賞

2023年度学会賞選考委員会における受賞候補者の決定：2023年4月～6月

2023年度学会賞受賞者の理事会承認：2023年6月（メール稟議）

2023年度学会賞授賞式：2023年8月8日（火）第62回全国研究大会において

2024年度学会賞候補者推薦締切：2024年3月末日

8. その他

- 1) 賛助会員に対するバナー広告の無料開放 (8/30 現在 11 社)
- 2) ホームページへの賛助会員動画掲載企画 (賛助会員プレゼンテーション)

以上。

2023年度 外国語教育メディア学会本部 予算案

2023年8月7日

2023年4月1日～2024年3月31日

項 目	予 算 額	内 訳
賛助会費	1,350,000	賛助会費 @50,000 × 27件
一般会費	921,000	前年度各支部会費収入 × 0.15
雑収入	0	
収益計(①)	2,271,000	
繰越金(②)	3,667,430	
法人化準備積立金(③)	92,400	
収益計(①+②+③=④)	6,030,830	

費 目	決 算 額	内 訳
印刷費	400,000	昨年度実績(機関誌59)号:377,300円(データ編集費 ¥268,000、J-STAGE登録 ¥45,000、抜刷作成 ¥30,000)
通信費	30,000	切手、レターパックなど
ネットワーク関係費	600,000	本部サーバー管理費・業務委託費、ドメイン維持料・受付フォーム作成費・受付処理業務費など
旅費交通費	250,000	会長・副会長会議旅費などの公務出張の交通費補助
会議費	25,000	会長・副会長会議他
全国研究大会開催費	500,000	全国研究大会参加申し込み機能修正等
事務費・業務委託費等	500,000	Scopus登録に関わる業務委託費
国際交流委員会費	20,000	
雑給	0	
事務用品費	50,000	文具・用紙・トナー・学会賞賞状作成費など
支払手数料	5,000	振込手数料
雑費	50,000	
費用計(④)	2,430,000	
次期繰越(⑤)	3,508,430	
法人化準備積立金(⑥)	92,400	
費用計(④+⑤+⑥)	6,030,830	

NEWSLETTER No. 102

発行日 2024年7月16日

発行所 外国語教育メディア学会 (LET)

会長 森田 彰